
Inconvenience

三輪 リシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Inconvenience

【Nコード】

N3049Y

【作者名】

三輪 リシア

【あらすじ】

コンビニエンスストアで起こる、不便な（Inconvenience）人間模様。

世の中は便利になっても、人の心は結局変わらないようで。

上島大吉（33歳・会社員・独身）は、近所のコンビニエンスストアに勤める篠原さん（名前以外不明）に恋をしていた。

大吉の恋は一向に進展しなかったが、彼を取り巻く人間関係が、こ

の恋を中心に動きを見せはじめる…。

主人公より脇役の章が多くなりそうな予感です。

大吉を取り巻く人間関係はどう動いて行くのか、そもそも大吉の恋は実るのか…?!

気長に見守っていただけたら幸いです。

恋する大吉

彼女に恋をしてから、彼にとってそのコンビニエンスストアは、世界で一番不便な場所になった。

身だしなみを整えなければ、行けない。

ニンニクなんて匂いの強い物を食べた日にも、行けない。

酔っぱらった日にも、行けない。

弁当など、うらぶれた感の漂う物は、買えない。

上島大吉三十三歳。独身。

大吉の恋する女性は、そんな世界一不便なコンビニエンスストアで働いてる。

社員食堂で、「今日のAランチ、ニンニクたっぷりスタミナもりもり定食」とともに、大吉は情けない気持ちを噛み締めていた。

「三十三歳にもなって、昼飯の献立を、好きな女性のシフトに左右されるなんて・・・俺ってばものすごく情けない状態にあるんじゃないだろうか」

周りを見渡す。

新聞や携帯片手に慌ただしく食事するもの。

グループで打ち合わせをしながら昼食をとっている社員もいる。

仕事に関しては、自分もまじめにきちんとやっているとと思う。

だが、恋愛に関しては・・・

もう一度彼は周りを見渡す。

みんなもつとちゃんと大人の恋愛をしているんだろうな。
結婚して、家庭を持っているやつも多いし・・・

「認めたくはないが、今の俺は、中二以下だな・・・」

自分が中学二年生だった頃をぼんやりと思い返してみる。
テレビに出ている人たちは、みんな自分より年上だったし、三十
三歳なんて年齢は、おじさんにしか思えなかった。

それが、いざ自分がこの年齢になってみると、あまりの成長のな
さにおどろいてしまうのだ。

好きな女の子に話しかけたくて、わざとその子の机の前に消しゴ
ムを落としたあの頃から、自分は一体どれだけ成長出来たのか。()
いや、全く変わりはない。()

その事実打ちひしがれ、彼は大きなため息を一つついた。

(でも昨夜の彼女も綺麗だったな。)

何度も頭の中で再生された彼女の面影を、大吉はまた思い返す。

彼女とバツタと大田さん

昨夜も彼は、その店に行ったのだった。もちろん身だしなみを不自然じゃない程度に整えてから……。

外から店内を見ると、いつもの男性店員の姿しか見えない。

「今日は休みなのかな……」

軽く落胆しながら、それでも油断せずに、彼は店に入った（突然バックルームから出てくる事もあるのだ）。

とりあえず買う物を買おうと、牛乳売り場の方に移動した大吉の目に、愛しい彼女の姿が飛び込んできた。

彼女は、店内の通路にしゃがみ込んでいた。

（どうしたんだろう。。。）

彼女は、右手にチラシのような物を持って、床を掃くような動作をしていた。

（……？……何をやってるんだ……？）

その時、彼女のそばで、緑色の小さな物が、ぴよん、と跳ねた。

（あ……シヨウリヨウバツタ……）

どうやら彼女は、店内に入り込んだバツタを、紙にのせて外に出すべく、奮闘しているようだった。

彼女から視線を外さないまま牛乳パックを手に取りろうとした時、彼女は大吉の存在に気がつき、視線をあげた。

目と目が合った。

その瞳の美しさ……。

少し紅潮した頬は、満開の桜の花のような色だった。

(……やっぱり彼女はすごく綺麗だ……)

「あ、いらつしやいませ、こんばんは。」

彼女は急いで立ち上がると、大吉より一足先にレジの方へ向かっていった。

彼は、シヨウリヨウバツタをひよいとつまみ上げ、店の前の植え込みに放してやった。

店内に戻り、会計を済ませる。

レジを打つときの、伏し目がちな彼女も、大吉は大好きだった。

「ありがとうございます。」

「あ、どうも……。」

そのときに二人は目をあわせてにっこりとする。
大吉の至福の時だ。

今日も一日頑張った自分への、神様からのご褒美のように思える。

彼が大満足で、店を出ようとした、その時だった。

彼女がもう一人の店員に、「大田さん、バツタ、外に出していただけますか？」と頼む声が聞こえた。

振り返ると、大田さんと呼ばれたその店員は、なんだか悲しそうな顔で、今から陳列するつもりだった雑誌を、足下に置いた。

「あの・・・僕出しましたよ。」

彼女と大田の両方に振り向かれて、大吉の声は、少し震えた。

「さつき・・・外に逃がしましたよ、シヨウリヨウバッタ・・・」

(やつちまった・・・。ここで、バッタ、ではなく、シヨウリヨウバッタ、などと種類まで言ってしまうのも、俺がもてない要因の一つだ・・・。何故かは分からないがそんな気がする。)

「あつ、ありがとうございます!!」

彼女と大田は、急に明るい笑顔になって、二人揃って彼に礼を言った。

「本当に助かりましたー!私、虫苦手で・・・。」

「僕もなんですよー!」

大田の、「僕もなんですよー!」は、一切大吉の耳には入っていなかった。

「そうなんですか・・・。良かったです。・・・じゃあ。」

「ありがとうございますー!」

彼女と大田のやけに明るい声に送られて、彼は店を出た。

大吉は早足で歩いた。

(店から一刻も早くはなれなければ・・・。離れなければ・・・。俺は大声で叫びだしてしまいそうだ!!!)

お前のおかげで、彼女の輝く笑顔を見られたよ!!
またなにかあったら助けるぜ!!」

大田の輝く笑顔の方は、大吉の脳裏から、一切消えていた。
彼女への恋心と、バツタへの感謝で、大作はその夜、どうやって
家に着いたのかの記憶がすっぱり抜けていた。

(あ、俺いま昼飯食ってたんだ……。)
ふと気がつくと、目の前の料理は冷めきっていた。

その時、大吉の脳裏に突然、恐ろしい考えが浮かんできた。

(昨夜は浮かれて気付かなかったけど……虫の嫌いな彼女が
ら見たら、素手で虫つかんだおれも、相当気持ち悪いんじゃないか
……?)

うわあああああああああ、会計の後、手とか洗ってたりして。
うわあああああああああ。馬鹿、俺の馬鹿。
アウトか!? セーフか!? どっちなんだ!?
うわあああああああああ!!!(

彼はまた、大きなため息を一つ、ついた。

探る雨宮

「大ちゃん、なんかミスでもやらかしたんかねえ。最近元気ないわよねえ……。」

大きなため息をつく大吉の背中を心配そうに見つめていた食堂のおばちゃんが、誰にともなくつぶやいた。

「いやーあ、あたしが思うに、ありや女だね。」

手は忙しく、料理を皿に盛りつけながら、また別のおばちゃんが答えた。

「女ああ!?!入社して10年経っても、浮いた一つなかった大ちゃんか!?!……ないないない!?!」

「あんた、浮いた噂一つなかったって、大ちゃんだってもういい年だよ!?!全くないとは言いつれんどしようよ。」

手だけはせかせかと動かしながら、おばちゃん達は一斉に大吉の背中を見つめる。

……仕事か、女か……大ちゃんの身に一体何が!?!……

「おばちゃん、Bランチ一つね。……何、大吉がどうかした?」
食券をカウンターに置きながら、おばちゃん達に声をかけたのは、大吉と同期の雨宮統むらみやだった。

「あらやだ雨宮さん、丁度良かったわよう。あのさ、最近、大ちゃん、様子が変じゃない?元気がないっていうか……今までに輪をかけてぼーっとしてるっていうか……。」

「あー、やつぱりそう思います?」

「そうよねえ、やつぱりそうよねえ!?!」

同期もやつぱりそう思っているのだ。

おばちゃん達は、自分たちの観察眼の鋭さを、雨宮に認められたような気がして、若干興奮しながら、彼にランチの乗ったトレーを手渡した。

「なんだろうねえ、心配よねえ。」

心配よりも、好奇心丸出しで、目をキラキラさせながら、おばちゃんは雨宮に言った。

「俺、ちよつと心当たりがあるんで、探り入れてみますよ。」

「あらやだ！あらやだようー、探りだなんてえ！・・・分かったらちゃんと報告してよね。」

「了解しました。」

雨宮は、おばちゃん達に敬礼し、大吉の席の方に歩き出そうとした。

「あれ、雨宮さん今日はお弁当じゃないの？」

おばちゃんの一人が、そういえば、という感じで雨宮を呼び止めた。

「ああ、今日は息子が学校の行事で弁当が必要で。俺の分なんか作ってる余裕なさそうでした。」

「あらそう。佳代ちゃん、元気にしてるの？」

雨宮は、社内結婚だったので、おばちゃん達は雨宮の妻の事もよく知っていた。

「あー、はい、おかげさまで・・・」

「佳代ちゃんもたまには会社に顔出してくればいいのにねえ。」

「あんた、佳代ちゃんだっていそがしいんだからさあ。」

「ごちそうさまでしたー。」

食事を終えた大吉が、食堂から出て行くところであった。

「あらやだ、大ちゃん行っちゃったよう。」

「雨宮さん、報告忘れないでよね、報告！」

ふりかえらずに自分たちに手を振る雨宮の背中を見ながら、おばちゃん達は口々に、「キザだねえ。」「いい男なんだけどねえ。」などと、また勝手なおしゃべりを始めるのだった。

大田さんの憂鬱

「今日も夜勤か……。」
午後八時半。大田の起床時間だ。
目覚ましを止め、のろのろと布団から起きだす。

曜日によって、大田の気持ちに若干の変化はあるが（納品の多い日や、酔客の多い土曜日は、いつにもまして気が重いのだ。）ほぼ毎日、気は重い。

「でもお仕事ですから。ねー。」
ベッドサイドのかわいらしい女の子のフィギュアに、大田は話しかけた。

（今日のシフトは……篠原さんとか。……じゃああの人来るな……。）
大田の頭に、大吉の顔が浮かんだ。なんだか少しだけ、店に行くのが楽しみになる。

窓の外からは雨音がしていた。
窓の外からは雨音がしていた。
いつもは原付で店に向かう大田だったが、雨の日だとそうも行かない。

電車となると、急いで準備をしなければならぬ。
また憂鬱な気持ちだが、彼を襲ってきた。

大田の自宅から店までは、上り電車を利用する事になる。
21時を過ぎた上り電車は、かなり空いており、彼は席に座り、
四駅分、とりとめもなく、色々な事を考えていた。

(僕があの人気持ちに気付いたのは、いつ頃だったっけ……。忘れちゃったな。でも、最低でも、ここ三ヶ月より前だな……。)

大田は、大吉が店に来ると、篠原さんが大吉のレジを担当するよ
うに、さりげなく別の仕事を始めるのだった。

彼は、多分自分と同じ年くらいであろう男の恋の行方に、なんと
なく、興味を引かれていた。

(好きな女の子の店に通う気分って、どんな感じなんだろうな。・
。・)

彼はもう恋愛を諦めていた。

関わった女性三人に立て続けにだまされ、お金を巻き上げられ、
大田のハートはぼろぼろになったのだった。

(でも三回もだまされるなんて、僕って本当に懲りないな……。)

ポケットに無意識に手を入れ、小さなぬいぐるみを触る。

いつも彼がポケットに入れている、手のひらサイズの、ひよこの
ぬいぐるみだ。名前はガーちゃん。一人夜勤の大事なお伴だ。

少し前までは、今ベッドサイドで留守番をさせているフィギュア
と同伴出勤をしていた。

(一人の夜勤中、彼がそのフィギュアに話しかけている最中に入
ってきた強盗が、何もとらずに逃げていった事があった。強盗は、
「ひくわー……。」と言い残し、店から出て行った。

「今時ストッキングかぶって強盗に入るお前にひくわ！……全

く失礼しちゃうよね。」そのままフィギュアに愚痴を言い続ける大田であった。

それ以来彼は、そのフィギュアを、守護神として大切にしている。しかし、店のカウンターにそのフィギュアをおいてレジをしていたら、一見の客に盗まれそうになったのだ。

（信じられないな。ヲタの風上にも置けないよ。）

それ以来、彼は守護神フィギュアを留守番させ、仕事中に何かあると、ガーちゃんに愚痴ったりするのだった。

店に着くと、この時間はいないはずの店長が大田をむかえた。

「あれ、店長、今日は篠原さんは……。」

「今日ねえ、篠ちゃん病欠！なんか熱出たみたいだよ。……何・

何何！？大田君寂しいの！？寂しいのおおおお！？」

店長は大田にじりじりと詰め寄ってきた。

「違いますよ……。」

（寂しがるのはあの人ですよ）と、大田は心の中で続けた。

午後11時を少し回った時間に、大吉が店にやってきた。

大吉もいい大人なので、あからさまな落胆を顔に出したりはしなかったが、大田にはそれがわかった。

「風邪が流行っているみたいですねえ。いつもこの時間に入ってくる人も今日風邪でお休みなんですよ。」

……などと気軽に話しかけられない自分を大田はよく知っていた。

大吉のレジを済ませて、「ありがとうございますー。」と
言うだけで、大田には精一杯だった。

怒れる桃子（とうじ）

雨宮と、食堂のおばちゃん達の話聞いてしまっただけから、桃子は心中穏やかでない日々を送っている。

大吉に女の影が・・・？あるんだろうかそんなもの。確かに最近、いつにもましてぼーっとはしているけれど。

雨宮がいった、「心当たり」という奴がとても気になる。

気になりすぎて、家でDVDなどを見ている、最近はずっとストーリーが追えないのだ。

気がつくまで頭の中で社内の女性社員達の顔を思い浮かべ、「あの子・・・？・・・いや待って、あの子は彼氏持ちだわ。・・・じゃあ、あの子・・・？・・・いやいや、ないない。・・・私・・・だったり？」

そこで、自分に恋いこがれる大吉を想像して、足をジタバタする桃子であった。

だが、大吉と自分は同期入社だ。何かとてつもない事件でもない限り、大吉が改めて自分を愛するなどと言う事はないだろうことを、彼女は知っていた。

雨宮君は、もう探りを入れたのだろうか。もしそうならば、その場に自分がいなかった事が痛烈に悔やまれる。

「いいやもう、明日私が探りを入れよう。・・・心当たりも何もないけど・・・。」

「桃子、今日大吉も誘って、昼飯いかねえ？」

次の日、雨宮の方から声をかけてきた。渡りに船つてやつね。今日はツイてるわ。洗いざらい吐かせてやる。公開裁判よ、見てなさい、大吉！！

過剰に熱くなる桃子であった。

昼休み、雨宮を先頭に、三人は歩き出した。

(どこに行くのかしら。)

もう雨宮は店を決めているようで、ずんずん歩いていく。

桃子は、これからいかにさりげなく探りを入れるかについて考え続けていた。

三人は何となく無言のまま歩き続けた。

雨宮が入ったのは会社から歩いて五分程の和食屋だった。

「いらっしやいませー。」

若い女性店員が三人を開いている席に案内した。

「こんにちは。九月に入ってもまだまだ熱いですねえ。お疲れさまです。」

女性店員が大吉に話しかけると、彼は、「ネクタイがねー、熱いですよ。」などと返事を返している。

・・・上島君はよくここに來てるんだ・・・。知らなかったわ・・・。

私、こんなに長い付き合いなのに、上島君の事、あんまり知らないのかもしれない。

少しの寂しさを感じながら、おしぼりで手を拭く桃子に、雨宮が目配せをしてきた。

(・・・何よ・・・)

彼女は目で問い返す。

雨宮はそのまま、女性店員と大吉に視線を移動して、そしてまた、

桃子に目配せをした。

(!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)
ちよっと待ってよこの人なの!?)

桃子はおしほりを握りしめ、思わずその女性店員の顔を凝視した。栗色の髪をして、目を黒いアイラインで縁取っている。年の頃は二十代半ば程だろうか。

(ふっつーの女じゃないの!)

桃子は、彼女を観察している自分の視線に強い敵意が込もってしまっている事に、まったく気付かなかった。

「ウーツ、ウン!」

(お前目が怖いよ!) 咳払いで、雨宮は桃子にそれを教えようとした。

彼女は全く気付かない。

桃子は脳みそをフル回転させながら、彼女にあって、自分に無い物は何かを見極めようとしていた。

「桃子何食う? 決めちゃえよ。」

雨宮が自分にメニューを手渡してきたので彼に目をやると、雨宮は口の形だけで(顔! 怖くなってる!!!)と、彼女に伝えてきた。

(なんなのよ雨宮くんは・・・え? あ・・・ご・・・ほ・・・そ・・・く・・・な・・・っ・・・てる・・・)

顎、細くなってる?・・・え? 私痩せた・・・? のかなあ?・・・そういえば最近あんまり食欲無かつたし・・・ふっつ。顎がしゅつとしちゃったかしら?)

「そ? ありがと雨宮くん。」

にこにこと自分に礼を言う桃子を見て、彼はさっぱり意味が分からなかったが、店員を恐ろしい目で凝視する彼女を止める事が出来たので、そこは特に追求しない事にした。

「いいや、三人とも今日の定食で。お願いします。」
雨宮が言つと、店員は厨房の方に下がっていった。

「三人で昼飯なんて、久しぶりだねえ。」
その彼の言葉には応えず、雨宮は大吉の方に身を乗り出して、言った。

「彼女だろ。」

(いきなり切り込むわね、雨宮くん！行っちゃって行っちゃって！
！ゴーゴーゴー！！)

桃子も身を乗り出して、彼の答えを待った。

「え、何が？」

(とぼけやがって大吉！！いらいらするわ、このきよっとーんとした顔！！)

「いやだからさ。お前、今の店員さん、好きなんだろう？」

「はあああああああああ！！？」

大吉は素っ頓狂な声を出した。店内にいた客たちがこちらに目をやったのに気付いて、三人は頭を突きつけてひそひそと話を続けた。

「なんでそんな話になつてんの！？」

「だってお前最近月・水・金だけここに来てるだろ？」

「ちよつと、あんたなんでそんなに上島くんの事に詳しいのよ！」

「隣の席だからなんとなく分かるんだよ。」

「ちよつと待ってくれよ、誤解も良いとこだよ・・・。」

ちらつと大吉を上目遣いで見ながら、雨宮は言った。

「誤解・・・誤解ねえ・・・。じゃあ、教えてもらおうか、お前が月・水・金だけこの店に来る訳を！！！」

・・・店からの帰り道、桃子は打ちひしがれていた。

（上島くんが・・・そんな中学生みたいな恋をしていたなんて・・・）

桃子の前では、雨宮が、これまた中学生のように、大吉を肘でつつきながら楽しそうにからかっていた。

「もうー、中二かよ前は。」

ニクニク食べたら会いに行けないって。」

「自分でもそう思うよ・・・でも、なんでうちの社食は、何でもニクニクたつぷりなんだろうな。」

「それは俺もいつも思うわ。・・・社食のおじさん、社員の恋路を邪魔したいんじゃない？」

男二人が楽しそうにじゃれ合いながら話しているのを見ているうちに、桃子の中に強烈な嫉妬と怒りが湧いてきた。

（あー、なんかすごい腹立ってきた。私が家で一人でワインを飲んでいたときに、あんたはその女のところに、鼻の下をのびきつたツラ下げて通ってたって訳ね。告白も出来ずに、その潤んだ目でカウンター越しにその女を見つめてたって訳ね・・・）

なんなのよ。その女のこと話す時の顔！うっとりした顔しちゃうて・・・。その女は別に女神でもなんでもないっつうの！いい年してその無防備なうっとり面、イライラするわ！

・・・どんな女なんだろ・・・。見たい・・・。）

「上島くん。」

彼女のなんだか思い詰めた声に、男二人も真顔になって振り返っ

た。

「にこにこマーケット？それともおげんきストア？」

「桃子お前また顔が恐くなってるって！」雨宮は笑いながら桃子に声をかけるが、桃子の耳には入らない。

大吉は、桃子の迫力に腰が引けながらも「ま、まあ店の名前はいいじゃない。」と流そうとした。

「教えて。教えないと・・・」

「教えないと・・・？」

「一週間、尾行するわよ。」

結局、大吉は答えた。桃子と自分の最寄り駅は、二つしか離れていないのだ。

尾行だって、やろうとすればやれるだろう。大吉の中で、桃子はフットワークが軽く、好奇心が強く、そしてなにより、言い出したら聞かない女、という位置づけになっていた。

その好奇心のほとんどが、自分に向けられている事にだけ、彼は気付いていないのだった。

「にこにこマーケットね。」

「おい桃子・・・お前、壊すなよ？」

雨宮は、桃子を好きだし、信頼もしていたが、大吉のことになると、若干クレイジーになる彼女を本気で心配していた。

「なんで私が上島くんの恋の邪魔をするのよ。」

桃子は笑って言ったが、雨宮の胸は嫌な予感で一杯だった。

そして、「面白い展開になんねーかなー。」という思いも、去来していた・・・。

大田さんの日常

大田は、週に五日、ニコニコマートで夜勤をしている。

休みの日は、大体、家でフィギュアを作ったり、秋葉原へ行ったりして過ごす。

時々、自分の好きな声優のイベントがあると、その日を指折り数えて、待ちながら過ごす。

今日は彼の休日だ。

休日でも彼はやはり夕方に起きだす。あまりいつもと生活の時間を変えてしまうと、どうしても次の夜勤に差し障りが出るのだ。

今日こそ、この間から取りかかっているフィギュアをなんとか仕上げたいところだ。

自室の片隅に、段ボールで軽く仕切りをした場所で、彼はフィギュアを作る。

（丁寧に・・・丁寧に仕上げよう・・・。大丈夫、僕は出来る、やれば出来る子・・・！）

自分に言い聞かせながら、エアブラシで色づけをして行く。

（大丈夫、大丈夫・・・。）

前回作っていたフィギュアは、大事な顔の部分で失敗してしまった。あまりにも出来上がりが楽しみで、彼は自分自身をせかしてしまい、大事な顔の部分の彩色でしくじったのだった。それでも、まだ修復の余地はあったのだが、彼の根気と集中力は限界を迎えてしまったのだった。

「こんなんじゃないなあああああい！」

納得のいかない仕上がりに、彼はもう一度修復する気力も無くなり、叫びながらそのフィギュアを壁に投げつけてしまったのだった。

「今度はあんなことにならない。絶対に仕上げる。絶対に焦らない。・・・大丈夫だよ、一号タンみたいな事にはしないよ。絶対に可愛く仕上げるからね・・・っ・・・!」

フィギュアに語りかけながら、作業に没頭する大田であった。

あまりに没頭していたので、階段をすごい勢いで上ってくる母親、絵里子の大きすぎる足音にも気付かなかった。

バシイイイン!!

ものすごい勢いで、襖を開けると、絵里子はどすどすと大田の自室に入ってきた。

そしてすごい勢いで全ての窓を開け始めた。

「智ち!! あんたまた換気しないでお人形作ってるね!! 臭い!! シンナー臭い!!」

馬鹿になるよ智!!」

「・・・あ、ごめん忘れてた。。。てか、絵里子さん、ノックくらいしてほしいとあれほど・・・」

「智あんた暇でしょ、防虫剤買ってきて防虫剤。」

「ええええー? 僕今忙しいよ。。。見りゃ分かるでしょ。。。大体防虫剤なんていますぐ必要じゃないでしょ?」

「今必要なジャストNOW! 私が今まであんたに、すぐに必要じゃないのにいそいで買ってきてなんて頼んだ事あった!? いや、ない。」

（もうやだこの人、また一人で完結してるし……。大体今までだつてそんなんばつかだつたじゃん……。）

「こんな暗くなつてから母親に一人で買い物に行かせる気……？
……うっ……うっ……」

お父さん……天国のお父さん……私たちの一人息子は、こんな親不孝者に育ちましたよ……？

うっ……うっ……」

絵里子のこの一人劇場が始まると、とてつもなく長いのだ。だから、もうこの「天国のお父さん」という台詞が出た時点で、大田は折れてお使いに出かけたりする。

あまりにパターン化された流れに、彼も一度意地になって、最後までこの絵里子劇場を見てやるうと思つたことがあつた。

結果、ひどい目にあつた。

やっている絵里子自身が楽しくなつてきてしまつたようで、小道具まで出して、智の父親との馴れ初めから現在までを、晴れ晴れとした顔で演じきつたのだつた。

きっかり四時間の一大叙情詩。

四時間。その貴重な時間を、大田はどぶに捨てたのだつた。

彼は、彼女があわよくば続編を演じ、また彼に最後まで見てほしいという野望を抱いているのに気がついた時点で、おとなしくさつさと買い物に出た方が効率的だという事に気がついた。

「絵里子さんいますぐ必要なんだねっ！？」

無言で彼女は首をブンブン縦に振つた。

大田さんの受難

次の日、大田はまた午後八時半、なんだかいつもより憂鬱な気分
でベッドから起きだした。

昨日はなんだか出端をくじかれ、不本意な休日になってしまった。
母親に頼まれた用事は、三十分程ですんだが、フィギュアの制作も
なんだかほかどらなかつたし、毎週楽しみに見ているアニメも、特
番とやらでつぶれた。

店の裏手の駐輪場に原付を止め、店に向かうと、黒猫が彼の目の
前を横切った。

(ひっ……)

そして、店に入るときに、入り口のマットに何故かつまづき、立
ち上がると、靴ひもが切れていた。

(……ひっ……ひいっ……)

なんだかもう嫌な予感しかしない。ポケットの中のガーちゃんを、
大田は強く握りしめた。

(嫌だー……。もうなんか悪い予感が全身を貫いているよー。

あー、やだなあ……。クレーマーでもくるんかな。嫌だなあ……
……)

午前零時までは、二人体制で仕事をするが、0時から朝の5時ま
では、大田は一人で夜勤をする。

(今日も0時までには篠原さんとかあ……。あの人来るかなあ。)

何となく大吉の顔を思い浮かべながら、大田は制服に着替えた。

「篠原さん、おはようございます。」

「大田さん、おはようございます。」

（今日も篠原さんは、篠原さんだなあ。

・・・篠原さん、あの人の気持ち・・・気付いてないんだろうなあ。）

大田にとって、彼女との仕事はやりやすかった。

彼女はいつも一定のテンションで、不機嫌だつたりする事も無く、かといって上機嫌な事も無く、にこやかに淡々と仕事をするのだった。

大田と彼女は、ドリンク棚にパック飲料を並べたり、レジを打つたりしながら、いつも通りの仕事を進めていた。

23時を少し過ぎた頃、一人の女性客が来た。初めて見る客だった。

髪は顎で切りそろえられたボブで、びっくりする程スタイルがいい。サングラスをしているので顔は見えないけれど、結構な美人のようだった。

ただ、致命的に・・・挙動不審だった。

「いらつしゃいませー。」

挨拶した大田に、あはっ、えへっ、ええ、まあこんばんは、などと言いながらこそそそきよろきよろしている。

カゴを片手に、商品を見ないで、店内をキョロキョロしてばかりいる。

(まさか・・・ま・・・万引き・・・っ・・・!?)

大田は仕事をしながらも、女から決して目を離さないようにした。女は、大田の視線にも気付かず、相変わらず何かを探しているようだ。

その時、バックルームで仕事をしていた篠原が、売り場に出てきた。

女は急に慌てたそぶりです、こそこそと商品を選び始めた。

(・・・?)

明らかに篠原を意識している。

篠原からは死角になっている場所で、彼女を気にしながら、商品を確かめる事もせず、ゆっくりカゴに入れて行く。

(・・・??)

・・・ハッ!!これはもしや・・・レズの痴情のもつれ・・・っ・・・!?)

他の客が来て、篠原がレジに入ると、女もまたレジに並んだ。

(篠原さんが危ない!!)

大田も急いでレジに向かう。

「ちょ、お兄ちゃんお兄ちゃん!」

コピー機の前に立っていた中年の男が大田を呼び止めた。

「はい、どうなさいましたか？」

聞きながらも、大田は気が気ではなかった。

(篠原さん・・・無事でいてくれっ・・・！)

「なんやこのコピーあかんねん。ピーピー言うばっかで、全然出てこんねん。ちよお、見てやー、頼むわー。」

「ああ・・・紙づまりですね」

コピー機を直しながらも、大田はレジの方を気にしていた。何かあったら、棚のジャンプを制服の腹の部分の内側にいれ、篠原さんを助けに行かなければ、と大田は思っていた。

「なんや、お兄ちゃんあのお客のお姉ちゃんが好きなん？」

男が大田に耳打ちしてきた。

「んもうー、ずーっとあつちばっか見よってからにいー。このこのおー！いやー若いってええなー。」

わいもな、若い頃お客さんに・・・」

「直りました！」

大田は、急いでレジへ入った。

「んもうー、そんなに急いでレジしたいんやなー、んもうー、わい、置いてきぼりやあ。」

若いってええなあー。」

男は、スムーズに動き出したコピー機の前で、ニヤニヤしながらひとりごちていた。

「お次にお待ちのお客様、どうぞー！」

大田は、女を自分のレジに誘導した。女は少し戸惑っている。

「どうぞ！お客様っ！こっ、こちらにふいつ！」

必死なあまり、彼の声は裏返ってしまった。

女は諦めたように大田のレジに並んだ。

カゴには、パイナップルの缶詰だけが大量に入っていた。会計の間も、女は篠原の方を時々盗み見ている。

（やっぱりだ。この女性は万引犯じゃない。篠原さんに何かあるんだっ！）

女は会計の時も上の空で、時々篠原の方を気にしながら、ゆっくり店から出て行った。

全ての客がはけると、店内は大田と篠原の二人だけになった。

「大田さん」

「篠原さん」

二人同時に声が出た。

「あ、すみません、篠原さんからどうぞ。」

「あ、あの・・・大田さんって・・・あのお客さんが好きなんですな。」

いつもの彼女には珍しく、少しニヤニヤしていた。

「あんなに必死に自分のレジに・・・。ふふっ。」

彼女はさっきの事を思い出しているらしくちよっと吹き出していた。

「・・・えっ!??!?ちっ、違いますよっ!あの人なんかすごい篠原さんの事気にしてたから、僕篠原さんが心配で・・・。」

「私を?・・・ふふっ。本当かなあー。ふふっ。」

「いや、本当ですって、すごい拳動不審でしたし。．．ちよ、篠原さん帰りとか気をつけてくださいよおお？

それだけでなく遅い時間なんだし．．。」

「大丈夫よ、帰り道、遅くても常に人通りが多いんだから。」

「篠原さん、あの女の人、知らないですか？」

「知りませんー．．ふふつ、お役に立てなくてごめんね大田さん」

「ちがつ、だーからー!!!」

なんとなく大田の心に引つかかりを残したまま、0時に篠原は帰って行った。

夜勤はやる事が一杯だ。

一人でレジをして、床を掃除して、時々酔っぱらい客に絡まれたりもする。

雑誌を並べ、フライヤーを洗い、新商品を並べ．．

あつという間に朝が来る。

5時にやってくる朝の時間帯の店員に引き継ぎをして、大田は6時に退店する。

「お疲れさまでしたー。」

店の自動ドアを出て、駐輪場に向かう大田に近づく人影があった。

「あのすいません．．．。」

振り向いた彼の前に立っていたのは、昨夜の拳動不審な女であった。

「・・・ひっ・・・!!!」

大田は思わず、声にならない悲鳴を上げた。

戦う大田さん

向かい合う二人の間に、触れたら斬りつける刃やいばのような緊張が走っていた。

二人はさながら、戦う前の蛇とマンガースのように、身じろぎもせず見つめ合った。

「あ……」

先に口を開いたのは、女の方であった。

(なんで……?どうして僕を待ってた!?!ずっと篠原さんの)としか気にしてなかったはずなのに……!!)

女は、続けた。

「ちよっとお時間、よろしいですか……?」

チヨットオジカンヨロシイデ
スカ?

なんと聞き飽きた台詞だろう。

そしてその問いかけに、彼は何度この言葉を返してきたことだろう。

「僕は綺麗なイルカの絵も人造ダイヤモンドも、聞くだけで英語がペラペラ喋れるようになる教材も、幸せになれる壺もブレスレットも持っています！」

そして僕はマルチには興味ありませんし、父は神社で神主をしていますからっ！さようならっ！！」

しかも、父は神主、のくだり以外は全て真実な大田であった。

いつもなら、時間の有無を聞かれると、この呪文を唱えてダッシュで逃げ出す大田であったが、今日はそうはいかない。

相手のターゲットは明らかに、自分ではなく、篠原なのだ。相手の狙いを知りたい。いや、知らなければならぬ。

そして僕は、僕なりの方法で、自分の相方を守りたいんだ……！

彼の胸は、今、そんな使命感で一杯だった。

「じ、時間は……大丈夫です、でも、店に忘れ物をしていたので五分……いや、三分だけここで待っていてください……っ……っ！」

言い残すと、彼は店に全速力で戻って行った。

脇目も振らず雑誌の棚へ向かう。

（さつき並べたばかりだ……。まだある筈……あつたっ！！！！！！！！）

彼は、棚から某結婚情報誌を二冊手に取った。

いつもなら憎らしく思えるこの重みが、今日はなんだか頼もしく思える。

この雑誌は、陳列のときには、厚み、重み、付録、どれをとっても店員泣かせである。

だが、防いでよし、攻めてよしという、武器としては、全国の店員達の間で定評のある雑誌なのだ。

「こ、これっ、お会計っ……！」

その時レジに入っていた守屋は、大田がなぜいざい言いなから結婚情報誌を（しかも二冊）買うのか、突っ込んだほうがいいのだろうか、しばし悩んだ。

ただ、こんなに急いでいる大田を見た事が無かったので、それには触れないことにした。

急いで会計を済ませ、守屋は彼に尋ねた。

「大田くん、袋はどう……」

「一冊だけお願い！」

答えるや否や、彼は来ていたＴシャツをまくり上げ、ジーンズのウエスト部分にもう一冊をねじ込んだ。

雑誌が、頑丈な鎧のように彼の腹部を守る形だ。

守屋は、この店で勤務を初めてまだ間もないが、彼だってコンビニエンス業界の一員である。

大田の行動の意味をすぐさま理解した。

「大田くんあんた……」

ちなみに守屋が大田をあんた呼ばわりしたのは、これが初めてである。

「生きて・・・帰ってこいよ・・・。」

心なしか、守屋の瞳が潤んで見えた。

「祈っててくれ。」

大田は守屋に向かって親指を立ててみせ、彼に出来る限りのさわやかな笑顔を残し・・・去って行った。

彼が出て行った自動ドアを見つめ、守屋はふっと微笑を浮かべた。
「無茶しやがって・・・。」

大田は急いで女のもとへ戻った。

彼女は、なんだか少し心細そうに大田を待っていた。

二冊の雑誌が、彼を勇気づけていた。

彼は彼女に聞いた。

「どこでお話ししましょうか。」

飛び出せ大田さん

三十分後、二人はとなりの駅の近くのファミリーレストランでテーブルを挟んで向かい合っていた。

大田は、原付も置いてあつたし、勤務先の側の店で話し合いたかつたのだが、女は頑として譲らなかつた。どうしてもニコちゃんマートの側から離れたいようだった。

テーブルの上のコーヒーを一口すすり、大田が口を開いた。

「あのっ……！きよ、今日は……どっ、どっ……」
その言葉を遮り女は彼に尋ねた。

「あ、あのっ、週に二、三回、背の高い、ひよろーとした、ぼやーとした感じの垂れ目の男が、店に来るわよねっ！？」

（あ、あの人の事だ……。）
彼の脳裏に、大吉の姿が浮かんだ。

（この人……もしかしてあの人の奥さんとかなのかなあ。

そいで、旦那の浮気の現場を押さえようとして、とか……？

……あの人が、結婚してたのか……。

見損なっちゃったな。そんなフラフラするようなタイプには見えなかつたんだけどな……。

……そっか……。

ふふっ、そういえば僕、人を見る目が無いんだつた……。）

彼女は、自分の問いに答えず、寂しそうに笑う大田をいぶかしげ

に見た。

「あの・・・？」

「大丈夫です奥さん。どういった誤解があるかは存じませんが、あの人はただ買い物をしていくだけですから！」

「えっ？奥さんって？」

「えっ！？」

「えっ！？」

当初、彼女は自分の事は明かさず、大田から大吉の恋の進展状況だけ聞き出せればと思っていた。

（ただ、こんなにあっさり彼と話す時間を持てたのは全く予想外の幸運だった。今もまさに大田の腹を守っている防具の事など知らなかった彼女は、人ごとながら、こんなに警戒心の無い彼が少し心配になったくらいだった。）

大田の誤解を解こうと、少しづつ話している彼女の胸のうちに、自分が彼に対してフェアではないことを仕掛けていることへの罪悪感が湧いてきた。

「私は・・・桐谷桃子って言います。彼の、ただの同僚。」

「あのお客さんのただの同僚のあなたと、僕はなんでここにいるんですか・・・？」

桃子は、ほんの数分向き合っただけで、なんだか大田に心を許している自分に気がついた。

（田舎の弟を思い出させるのかしら、この子・・・。）

「私彼が好きなの。彼が好きなのを見たかったし・・・彼とあの女の人がどんな感じなのか・・・知りたくて・・・」

「ふーん……。あの……。篠原さんに危害を加えたりは……。」「
ないないない!!!」

桃子は思いもよらない事を聞かれて、首をぶんぶん横に振った。

「え、私そんなに怪しかった!?!」

情けない声で彼女は彼に聞いた。桃子の、綺麗な弧を描いていた眉は、今や情けなく八の字になっている。

「はい。僕、あの店勤めて結構長いですけど、あなたみたいに怪しいお客さんは初めて見ました。」

嘘だった。桃子もかなり怪しかったが、もっと怪しい客などいくらでもいる。店内に露出狂がでたこともあるくらいだ。

(あれ、僕はなんだか今、すごく失礼な事を言ったぞ。僕、どうしたんだろう……。)

彼は自分では気付いていなかったが、桃子の眉がもつと情けない形になるところが見たかったのだ。

「つまりあなたは、あのお客さんに長い片思い中、ってことなんですよ?」

「随分はつきり言うのね。」

「で、ストーキングをしたと。」

「大吉をストーキングした訳じゃないわっ!!!」

「でも、危険じゃないですか、昨夜、もしお店であのお客さんと鉢合わせしちゃってたら、なんて言つつもりだったんですか?」

……。しかもあんな怪しい感じで……。」

「お願いだからもう少し言葉を選んで頂戴……。胸が痛くなっ

てきたわ……。

……大吉ねえ、今週九州の方に出張なのよ……。」

「ほうほう。」

大田は、彼女の口から語られる大吉の話しに夢中になった。

彼は、自分より四つ年上だと言う事。(桃子は大田と同じ年だった。それを知ると彼女は、「うっそおお!? 成人成り立てほやほやだと思ったああ!」と叫び、彼を慥然とさせた。)

店にこない日は社食で昼を食べる事。(その件に関しては、今こゝうして話しても腹が立つ、と彼女は言った。)

社食のおばちゃん達も、彼の事を心配している事。

同僚の雨宮はそれをおもしろがっている事、などなど。

もつと知りたい、と大田は思った。

何を? 大吉の日常を?

そうではない、自分と異なる世界に住む、同世代の人間達のことを。もつともつと知りたい、と彼は痛切に思った。

二時間程話しただろうか、何となく、そろそろお開き、という雰囲気になった。

……もつと知りたい。僕はもつと聞きたいし、話したい……。

「あのっ……来週また話しましょう。」

とっさに彼の口から出た言葉だった。

「……どうして?」

「なんだろう……好奇心……かな。」

「好奇心は猫を殺すのよ、知らない？」
彼女はヴィヴィアン・リーのように、片方の眉をくいつとあげてみせた。

「それを言うなら、今日好奇心に殺されたのは、桃子さんですけどね。」

無表情に返す彼の言葉に、彼女の眉はまた情けない八の字になった。

篠原さんと強盗と大吉

「熱い・・・」

喉の渴きと、全身の毛穴から吹き出す嫌な汗に、大吉は、ビジネスホテルの一室で目を覚ました。

時計は午前四時を少し回った所だ。

彼は、寝起きとは思えない素早さで着ていた浴衣を脱ぎ、洗面所へ向かう。

コップに水を満たし、一気に飲み干すと、そのまま頭から冷たい水を浴びた。

乱暴にタオルで髪を拭き、またベッドへもどり、うつ伏せに倒れ込む。

そうして彼は、しばらくじっとしていた。

飲み過ぎた翌日の明け方に、時々大吉はこんな風になる。

一気に体を冷やさないと、貧血のような状態になってしまい、動けなくなってしまうのだ。

冷水と乾き始めた汗が、急激に大吉の体を冷やして行く。

（大丈夫、もうすぐ楽になる・・・）

経験からそれを知っている彼は、自分にそう言い聞かせながら、十分程横になっていた。

のそのそと立ち上がり、窓に近づくとカーテンを開ける。

こつして見下ろすと、数時間前にはあんなに賑やかだった博多の町も、いまはさすがに眠っているように見える。

（篠原さんは今頃何をしてるかな……。寝てるか、さすがに……。）
……。一人じゃなかつたり……。して……。）

また気分が悪くなりそうだったので、彼は悲しい考えを頭から追い出すべく、ふるふるっと頭を振った。

今日は五日間の博多出張の最後の日だ。昨夜までの四日間、大吉は、出張先である、工場の社員達に、接待という名目で飲まされ続けた。

「大ちゃん！今日は俺がいい店に連れてっちやるけんね！」

毎日幹事を変え、飲み会は盛大に行われた。

いつもはせいぜい二日の出張なのだが、今回は、彼の勤める本社と、工場を結ぶオンラインシステムの総入れ替えがあるので、その研修を行い、トラブルが起きた際には対処する為に、若干長めの出張となった。

長く店に行けないと、その間にもしかしたら彼女は辞めてしまっているのではないかという不安が、いつも大吉の胸を苦しくさせる。

（篠原さんは、もしも店を辞めるときには、俺に教えてくれるだろうか……。）

それを思うと、大吉はなんだかいつも悲しくなる。

たとえ時々雑談をしたりする事はあっても、大吉はただの客で、わざわざ辞めるなどと報告をする義理は彼女には無いのだと言う事を、思い知らされる。

また彼は悲しい気持ちを追い払うようにふるふるっと頭を振ったが、それは全身の震えとなって広がった。

体を冷やしすぎてしまったようだ。

「うーっ、寒いつ！」

叫びながら大吉はベッドに飛び込んだ。

(あと三時間眠れるな……)

毛布にくるまると、眠る前恒例の、彼の妄想シアターが開幕のベルを鳴らす。

今日は悲しい事を考えてしまったので、それを打ち消すような、一番のお気に入りの一本を流すことにした。

大吉が店に入ると、都合のいいことに、篠原が一人で仕事をしている。

棚の下の方にある商品をとる為に彼がしゃがんだとき、自動ドアが開くと、一人の男が店に入ってきた。

ゆらりと立ち上がった男は、じりじりと大吉に近づいてくる。

大吉ピーンチ!!

だが、彼はひるむ事無く、華麗な手刀を決め、男は包丁を落とす。

そのまま男の手をとり、引倒す大吉。彼は、男の背に馬乗りになり、篠原に叫ぶ。

「確保!!!篠原さん、警察を呼ぶんだ!!!」

「ハ、ハイツ!!!」

強盗を連行していく警官を見送ると、篠原は泣きながら大吉の胸に飛び込む。

「あんな無茶して!!!あなたに何かあったら・・・私・・・私っ・・・!!!」
好きだったの・・・初めてあった時から・・・。」

「俺もさ・・・。」

そして二人は、遠ざかっていくサイレンの音をBGMに、熱い口づけをかわすのだった。

—完—

大吉は、幸せな気分で眠りについた。

雨宮と銃声軍

「ぶわああああつく……しよいやああ!!!!」

改札を出た途端に大きすぎるくしゃみをした雨宮に、周囲の人達は何事かと視線を向けた。

「へへっ、すいません。」

なんとなく表情で謝ると、彼らは安堵の表情を浮かべ、それぞれ散っていった。

「うーっ、寒いなあおい！」

十月も半ばを過ぎると、急に寒さが沁みる。

深夜の下り電車は、ほどほどに混み合っており、汗ばむ程だったが、降りた途端に秋の終わりを実感させられた。

「ぶわああああつく……しよいやああ!!!!」

また大きなくしゃみが出てしまう。もし今ここに妻の佳代子がいたら、絶対に他人のふりをするだろう。

「統ちゃん、そのくしゃみどうにかならないの？」

付き合い始めた頃、よく彼女に言われたものだった。

「なんか、あの、プロレスラーのマイクパフォーマンスみたいよそれ……」

彼の脳裏に、「かかってこいやあああ……！」と叫ぶ、某プロレスラーの姿が浮かんだ。

そうか、俺のくしゃみはあれなのか。

付き合い始めたばかりの彼女に、そう指摘されて、彼は少しへこんだ。そして、自分のくしゃみをなおそうと心に誓ったのだった。

会議中に、その決意を実行する機会が訪れた。会議は煮詰まり、重苦しい雰囲気、その場を支配していた。

「ふい……ふあ……」

あの大きなくしゃみの前触れが、雨宮の鼻をくすぐった。

(来い！止めてやる……！)

彼は決して口を開くまいと決意した。

「……………つくん……」

なんとも形容しがたい、おかしな音が彼の口から漏れた。ただ、音量は圧倒的に小さい。

だが、次の瞬間、彼の両の鼻から、盛大に鼻水が飛び出していた。そしてそれは、会議室の机にぎりぎり触れない高さで、ゆらゆらと揺れていた。

それからしばらくの間、彼のあだ名は「営業部のアメリカンクラッカー」になった。

屈辱の歴史である。

そして、その一件以来、佳代子がかれのくしゃみに口を出す事もなくなつたのだった。

そんなことを思い出し、一人にやにやしなから、雨宮は家路を急いだ。

玄関の鍵をそつと開けて、静かに家に入る。子どもが出来てからは、いつもそうしていた。

靴を脱いで、部屋にあがろうとした時、どどどと階段をおりてくる足音がした。

何事かと目をやると、六歳になる勇紀が、すごい勢いで階段をおりてくる場所であった。

「お父さああああん！！お帰りなっさああああ！！」

最後の二段を飛ばしていきなり雨宮の胸に飛び込んでくる。

「ぐはああああっ！」

息子を受け止め、そのまま彼は盛大に尻餅をついた。

佳代子と、下の娘さおりは、階段の途中から、そんな雨宮の姿を見て、笑い転げている。

「お前らまだ起きてたのかあ！そしてなんなんだこのテンションは！？」

「お父さん、お父さん、明日じゅうせいぐんが来るんだって！」

勇紀は、雨宮の上に馬乗りになったまま、眼を輝かせてまくしたてた。

「銃声軍……！？なんだその物騒な団体は……」

あつけに取られた彼の顔を見て、また佳代子は笑い転げた。

そして、笑いすぎで出て来た涙を拭いながら、子ども達に

「はいはい、後はママから話しておくから、あんたたちはもう寝なさい！」
と言った。

勇紀は、「でもおー！」と抗議の声を上げたが、「早く寝ないとパパにうまく話してあげないよ！」と言われると、すぐに寝室へ戻っていった。

佳代子の話しをまとめると、こうだった。

明日の夜、オリオン座流星群がやってくる。

勇紀は今鼻が詰まっているからあんなことになってしまったが、軍隊は一切関係ない話である。

明日はまだ水曜日で、平日ではあるが、勇紀がどうしても見たいと言っている。

できれば私も見たい。あなたと状況が許すのならば、大量の流れ星が見たい。

つきましては明後日の木曜日に有給休暇をとって、明晩、奥多摩で流星群を見られませんか？ということだった。

「あいつそれであんなにテンション高かったのか」

先ほどの息子の様子を思い出し、彼は笑ってしまった。
佳代子も一緒に吹き出している。

「…そうだな、最近ずっと忙しかったし…今日一段落した件もあるし…有給も全然消化出来てないから、行くか！」

「っしゃあああ！」

佳代子は力強くガッツポーズを決めた。

「勇紀の学校はいいのか？」

「うん、滅多にない事だから、大丈夫よ。」

二階の寝室からも、「っしゃあああああ！！」という雄叫びが聞こえて来た。

「勇紀！！寝なさいって言ってんでしょ！」

佳代子は叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3049y/>

Inconvenience

2011年12月17日12時01分発行